読ミカケ

Book Portalの読書案内

November 2020, No.1

Wasedasai2020

TAKE FREE

Concept

最近読書してないな。読みたかった本、挫折した本、家に居る今こそがチャンス。あなたが新たな読書生活をはじめられますように、そんな思いを込めました。企画ごとに、編集員がテーマに沿って選んだ本を紹介しています。手に取ってくださった方の「読みたい！」が見つかれば幸いです。

Contents

書を開けよ、旅に出よう　2

拝啓　読書好きのあなたへ　10

BOOKPORTALの紹介　22

編集後記　23

書を開けよ、
旅に出よう
本の中でなら、
思うままに旅ができる。
さぁ、今こそ本を開いて
気ままな旅に出よう！
-map-

羽田圭介『走ル』

目的のない旅。ふとした思い付き自転車を乗り出した高校生の彼は、日常世界を はるか置き去りに抜け出してしまった。しかし同時にその異世界はそのペダルの一漕ぎの積み重ね延長線上にあるのだ。

見知らぬ土地にいる自分と、携帯でつながることができる日常、そんな彼の旅は、その現実と非現実の不可分性に疑問を抱かせる。受験・恋愛・人生、その先に何があるのだろうか。目的のない旅の末にその答えを探しに行く、そんな小説である。

コロナ禍で人との接触が敬遠され、また公共交通機関での移動も抵抗感がぬぐえない今、彼のように自転車放浪などはいかがだろうか。きっと彼と同様、異世界にたどり着いたとき、その連続体としての自分に何か気づきを得ることができるであろう。道はどこまでも続いているのだ。

羽田圭介著
『走ル』
河出書房新社

片岡義男『町からはじめて、旅へ』

早稲田大学の卒業生でもある片岡義男の初期のエッセイ集。前半が彼のライフスタイルが綴られた「町からはじめて」、後半がアメリカ西海岸やハワイへの旅についての「旅へ」と二部に分かれている。

この本は1976年に刊行された初版本をオリジナルデザインのまま復刊したものだ。そのため、装丁や活字のフォントから70年代の空気を感じることができ、まるで当時の日本にタイムスリップしたかのような感覚におそわれる。また、オールドアメリカのライフスタイルやアメリカへの憧れが乾いた、お洒落な筆致で綴られており、片岡義男の独特の世界観に夢中になるに違いない。そして何よりも、彼の文章を読んでいると旅に出かけたくなるのである。遠くへ出かけて、日常から離れて思いっきりいつもとは違う空気を味わいたくなるのだ。この本には私たちを旅へと誘う言葉が詰まっている。ぜひお手にとって片岡ワールドに浸ってみるのはいかがだろうか。

片岡義男著
『町からはじめて、旅へ』
晶文社

書を開けよ、旅に出よう

三浦しをん

『ふむふむ　おしえて、お仕事！』

私はなんの職業に就きたいんだろう。仕事をするってどういうことなんだろう。そう思った時におすすめの一冊。この本は、15職種16人の女性へのインタビュー集である。靴職人、お土産屋、動物園飼育係、フィギュア企画開発、漫画アシスタントなど、さまざまな対象に目次を見ただけでもわくわくする。

「物語を宿していないひとはいない。」と述べられているように、ふむふむと聞き取った話には、数々のドラマが含まれている。大学卒業前の一大決心、自分の結婚式用の着物の染色、自分よりずっと年上の男性に指示を出す現場監督という立場……。読んでいて勇気づけられたり、憧れたり、ふむふむしたりしながら、たくさんのことを知ることができる。

職業に誇りをもって働くひとはみな美しい。世の中にはどんな職業があるのか。どんな仕事をしたいのか。本の中で自分探しの旅をするのも、たまにはいいのではないだろうか。

三浦しをん著
『ふむふむ
おしえて、お仕事！』
新潮社

向田邦子

『向田邦子　ベスト・エッセイ』

向田邦子は『阿修羅のごとく』や『寺内貫太郎一家』などのテレビドラマの脚本家として活躍しただけではなく、『思い出トランプ』で直木賞を受賞した作家、また、エッセイストとしても知られている。そんな彼女のエッセイ50篇が家族、旅、仕事などのテーマ別に収録されたエッセイ集である。

向田邦子のライフスタイルは多くの女性の憧れの対象であり、このエッセイ集からも彼女の生活を垣間見ることができる。また彼女は旅行好きとして知られており、旅に関するエッセイを数多く残している。そんな旅好きの向田邦子であったが、皮肉なことに旅行中の飛行機事故でこの世を去っている。このエッセイ集には旅に関するものだけではなく、飛行機についてのエッセイもあり、読んでいてやるせない思いになる人もいるだろう。しかし、彼女のエッセイを読んでいるとそれ以上に彼女の生きた人生、彼女の見た世界を感じたいという思いが大きくなるに違いない。

向田邦子著
『向田邦子
ベスト・エッセイ』
筑摩書房

新井素子『ひとめあなたに・・・』

これは普通の旅の物語ではない。一週間後に隕石が激突する地球、最後に一目恋人に会おうと練馬から鎌倉まで歩くことを決めた主人公圭子と、その途中で出会う四人の女性の物語だ。「あたし」で知られる著者の独特な文体は、するする頭に流れ込んでくる。読者はそのまま、価値観や常識がぐちゃぐちゃの混沌とした世界の中で圭子と一緒に恋人の家を目指す。道中で会う女性は様々だ。浮気を黙認してきた妻由利子、受験で勉強づくしだった女子高生真理、眠ることが大好きな少女智子、お腹の子を守りたい新婚の妻恭子、四人それぞれありふれた事情を抱えていたが、地球滅亡の危機をきっかけに狂気へと足を踏み出してしまう……。彼女らの顛末に心がざわつく一方で（特に由利子の話は完全なるホラーである）、圭子の純粋に恋人を思う気持ちには救われる。本書の読後感はあたたかいものだが、学生の私には真理の狂気への共感と恐怖がいやに印象的だった。

新井素子著
『ひとめあなたに・・・』
講談社

遠藤周作『深い河』

「インドに行くと世界が変わる」なんていう言葉は、私は嫌いだ。そこには自分も知らない真の自分がいるかのような幻想がある。しかし、この小説はまさに「インドに行くと世界が変わる」疑似体験をさせてくれる。インドへのツアー客は皆、あまりにも平凡だが、その目的はある種荒唐無稽な他人には理解し得ないものである。本作品は作者の最大のテーマであるキリスト教を題材とした彼の代表作である。だが、宗教だからと身構えて読む必要はない。宗教をだれしもの抱える「悩み」や「愛」の欲求という形に咀嚼して遠藤は人間として大事なものを読者に教えてくれる。空想の中で共にインドへ「旅」し、心を豊かにしてくれる、小説の中の小説である。「玉ねぎ」のふところは深い。

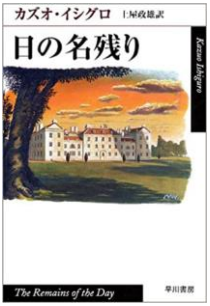
遠藤周作著
『深い河』
講談社

書を開けよ、旅に出よう

カズオイシグロ『日の名残』

戦前から執事として自らの品格を追求してきたスティーブンスは、ちょっとした機会から短い旅に出た。かつての女中頭と会うために。イギリスの美しい田園風景を眺める中で、スティーブンスの胸には様々な思い出が去来する。古風な情緒と優雅な言葉で紡がれる輝かしい時代。語るスティーブンスの言葉はいかにも誇らしげだ。けれども、読者の心には次第に一つの疑念が湧きおこる――スティーブンスが宝として抱くその栄光は、彼自身の盲信に裏打ちされているのではないか？「旅」という空間の移動と時間の経過に従って起きるごくわずかなスティーブンスの変化が、私たちの心の中で違和感を叫び始める。いわゆる「信頼できない語り手」の姿が露になっていく、この文章の展開は巧みである。やがて元女中頭と会ったスティーブンスは一つの真実を知ることとなる。

人間の普遍的な失敗と、その後の姿が穏やかな読後感と共に読者に迫る、ブッカー賞受賞作。



カズオイシグロ著
土屋政雄訳
『日の名残』
早川書房

宮脇俊三『時刻表2万キロ』

時刻表2万キロ』は鉄道ファンで、中央公論編集者でもあった筆者が、当時の国鉄全路線を完全乗車するまでの旅行記をユーモアたっぷりに綴った紀行文である。この本の出版後、日本各地に留まらず世界各地の鉄道旅行記で名をはせた宮脇俊三の記念すべきデビュー作でもある。今や、多くの人が「乗り鉄」という言葉を耳にしたことがあるとおもうが、彼はそんな乗り鉄のはしりともいえる存在だ。

いくら日本各地の鉄道といっても、2万キロというと、ちょっと想像がつかない。だいだい東京から北九州の小倉までが１１００キロだから9往復してだいたい同じくらいといえば、どれだけのスケールかわかるだろう。私が本のなかで最もお気に入りなのが、筆者がついに全路線制覇を達成した足尾線（群馬県・栃木県）の乗車記だ。全路線を制覇したというなんとも言えない達成感がひしひしとつたわってくる。

この1年で旅の概念は大きく変化したといえるだろう。だからこそ、観光地を巡るのでもなく、ただ列車に揺られ、車窓から思い耽るような旅行がしたくなる、そんな1冊である。

宮脇俊三著
『時刻表２万キロ』
KADOKAWA

北杜夫

『どくとるマンボウ航海記』

『どくとるマンボウ航海記』はエッセイスト・作家と医者という二つの顔を持つ筆者が、水産庁の調査船に船医として乗船し、世界を回遊した旅行記である。北杜夫エッセイ独特の表現力を私が書評として書き表すことはとてもできそうにないが、旅のトラブルを面白おかしく奔放に書いており、旅好きにはぜひとも手に取ってもらいたい1冊である。

筆者の優れた筆致による旅行の描写は、今や金持ちの海外旅行手段となって久しい船旅の新鮮さと相まって、船旅への興味をそそられる。（そういえばクルーズ船という単語になぜか懐かしさを感じてしまうのは私だけではないだろう）さらに、海外旅行に行くことは当分難しいこのご時世だからこそ、このエッセイがかかれた1960年という海外旅行がまだ珍しかった時代と重ね合わせて読んでみるのも面白いだろう。

北杜夫著
『どくとるマンボウ航海記』
KADOKAWA

森見登美彦・上田誠

『四畳半タイムマシンブルース』

六年越しに、『四畳半神話大系』のもう一つのパラレルワールドが現れた！上田誠による舞台作品「サマータイムマシン・ブルース」を原案とする本作では、著者の初期代表作『四畳半神話大系』の登場人物たちが、壊れたクーラーのリモコン（すなわち失われた快適空間）を取り戻すため、タイムマシンで昨日へと出発するのだが…。

小規模すぎるタイムマシンの使い方にグッときつつ読み進めると、主人公・「私」や小津などおなじみの面々が、たいへん無意義で、でもたいへん魅力的な四畳半的日常を駆け抜ける姿に懐かしさが溢れ出す。過去改変と宇宙消滅の危機、リモコンの運命といったSFならではの要素を含みながらも、しっかりと「森見節」で貫かれた作品となっている。『四畳半』とはまた違った「私」とヒロイン・明石さんとの恋路、ちらりと伺えるその先も見どころだ。

コロナ禍で自由に旅ができない今、彼らと共に時間旅行へ出かけてみるのもまた一興である。

森見登美彦・上田誠著
『四畳半タイムマシンブルース』
KADOKAWA

書を開けよ、旅に出よう

アガサ・クリスティー

『春にして君を離れ』

旅は日常を離れ、自分を見つめなおす時間を与えてくれる。この小説の主人公ジョーンもそうだ。旅から帰り予期せめを食らった彼女は駅の宿泊所に数日とどまるはめに。それがあまりにすることがなく暇なので、彼女は優しい旦那や娘、息子とともに歩んできた充実した自分の人生について改めて振り返りはじめる。

推理小説の名手としてあまりに有名な「ミステリーの女王」アガサ・クリスティだが、別名義で発表されたこの作品では少し毛色が異なる。誰も死なず、名探偵ポアロやミス・マープルも出てこない。ジョーンは家族や友人と離れ、たった一人で日常に見え隠れしていた不穏な影に初めて目を向ける。

ジョーンに自己投影をすればするほど恐ろしくなってしまう。そして、痛烈なエピローグは心をひりつかせ、この小説を忘れられないものにするだろう。読み終えたら、きっとわが身を顧みずにはいられなくなるはずだ。

アガサ・クリスティー著
中村妙子訳
『春にして君を離れ』
ハヤカワ文庫

酒井順子・ほしよりこ

『来ちゃった』

人気エッセイスト・酒井順子さんの文章と、『きょうの猫村さん』で有名な漫画家・ほしよりこさんのイラストによる旅エッセイ。行き先は「出生率一位の地」「寅さんが最後に行った地」など旅行雑誌や旅番組では取り上げられないようなマニアックな場所ばかりだが、ふたりはとにかく旅を楽しんでいて、こちらはその空気感にとても癒される。ちなみに、単行本の表紙のこけしは「こけし工人がいる温泉」を訪れたときにお互いの顔を描いたものだそう。

さまざまな意味で「来ちゃった……」とつぶやきたくなるような目的地でも、読めば行ってみたくなること間違いなし。普通に旅行ができるようになるまでに、この本で「あたりまえでない観光地」への想像を膨らませておくのも楽しいかもしれない。

No Image

酒井順子著
ほしよりこ絵
『来ちゃった』
小学館文庫

芦屋伸『新日本奥地紀行ー イザベラバードを鉄道でゆく』

イザベラ・バードは、明治十一年（一八七八）に江戸から蝦夷地までを旅し『日本奥地紀行』を著した、イギリス人紀行作家である。彼女は四十七歳にして、通訳兼ガイドを連れ日本の最果てへと挑んだ。本書は、そんなバードの足取りを鉄道、主に鈍行列車で追った紀行文だ。

人々の好奇の目や衛生環境の悪さなど、多くの障害がある中で旅を続け、様々な文化を知り書き残そうとするバードの探求心には驚かされる。アイヌとその文化に対して愛情をもって接し、讃える彼女の姿は印象的だ。また、著者が旅の途中で出会う人々や食についての記述も、本書の大きな魅力である。特に、青森県黒石で著者が体験したもてなしには心が温かくなった。「見知らぬ旅人を歓待するという、明治の世と変わらぬ心」が現代にも確かに残っていることに嬉しくなる。

現状が落ち着いたら、自分も北へ旅をしよう。読後、そう思わずにはいられない一冊だ。

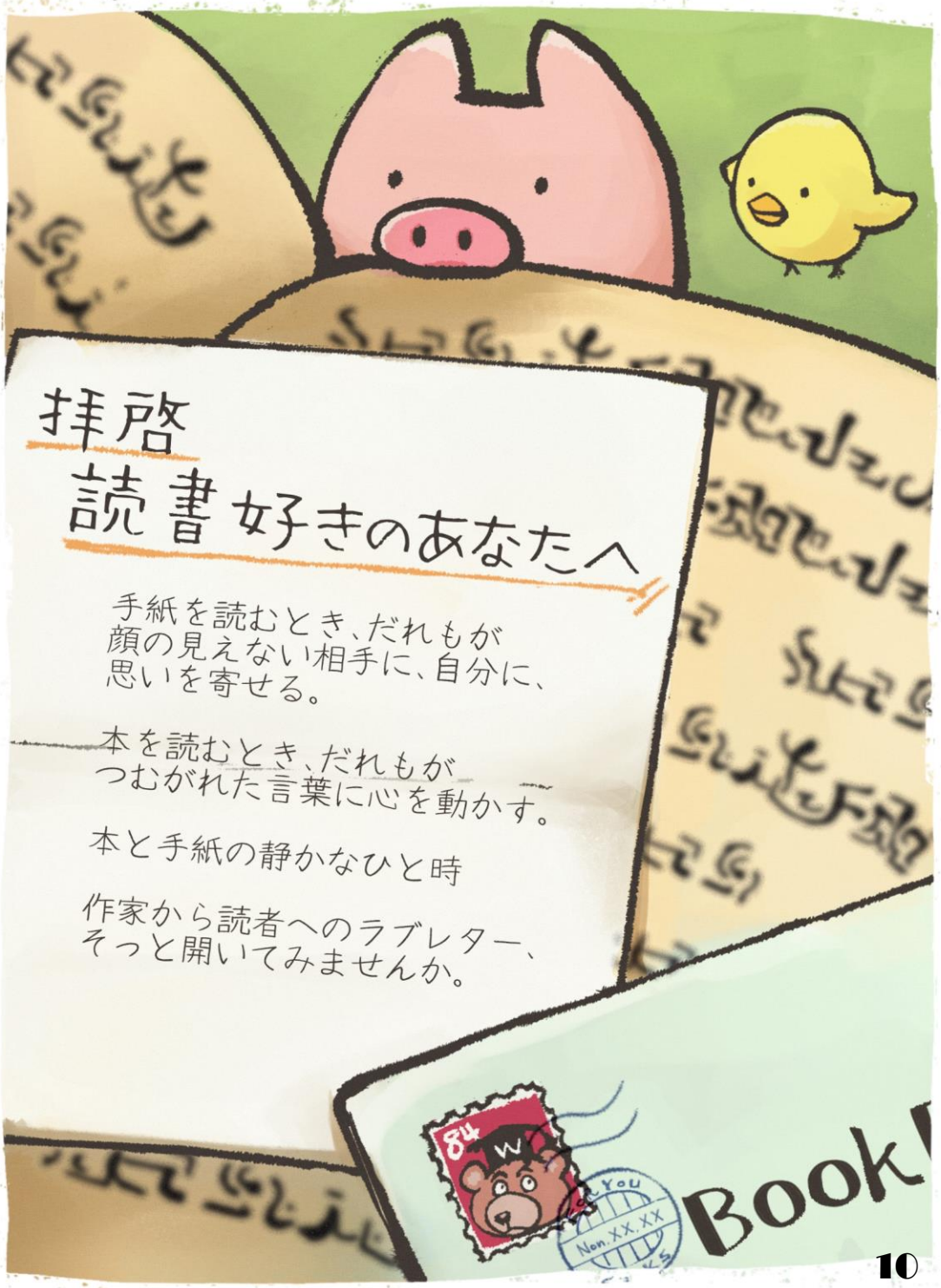
芦屋伸著
『新日本奥地紀行ー
イザベラバードを鉄道でゆく』
山と渓谷社社

角田光代『世界中で迷子になって』

岸の彼女』や『八日目の蝉』などの数多くのヒット作を生み出し、早稲田大学文学部の卒業生でもある角田光代による　エッセイ集。

30カ国以上に旅行に行き、ひとりでふらりと旅に出ることも多いという。旅行に「取り憑かれている、といったほうが近い」述べるほど、旅好きの彼女。しかし、ビビリ体質でいまだに旅慣れしていないという。それでも旅に出かけるのは「本当にそこに世界があるかどうか、知りたいだけ」だと述べる。そんな彼女のエッセイを読んでいると、肩肘張らずにひとりで旅に出掛けるのもいいかもしれないと思う方も多いだろう。また、さすが直木賞作家である。彼女の紡ぐ言葉はユーモラスで思わずくすりと笑ってしまう。文章のうまさだけでなく、「アジアは水で、ヨーロッパは石なのだ」と表現するなど、観察眼の鋭さにも脱帽する。この本を読んで旅に出るのもよし、旅に出掛けた気分になるだけでもよし。角田光代の魅力が詰まった一冊である。

角田光代著
『世界中で迷子に
なって』
小学館



拝啓
読書好きのあなたへ

手紙を読むとき、だれもが
顔の見えない相手に、自分に、
思いを寄せる。

本を読むとき、だれもが
つむがれた言葉に心を動かす。

本と手紙の静かなひと時

作家から読者へのラブレター、
そっと開いてみませんか。

俵万智『サラダ記念日』

俵万智著
『サラダ記念日』
河出書房新社

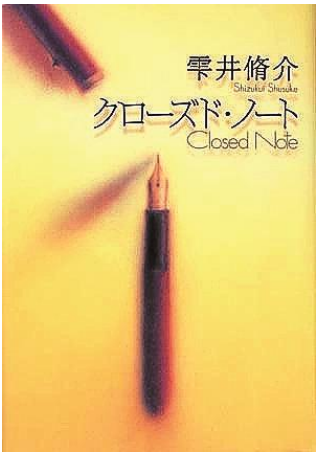
言わずと知れた『この味がいいね』と君が言ったから七月六日はサラダ記念日」の句が収録されている有名歌集である。この歌集が発行されたのは1987年で今から30年以上も前のことだが、作者が20歳のおわりから24歳のあいだに詠まれた歌が収録されていることもあり、情景は身近なものばかりだ。短歌はまったく難しくない。ささやかでなんてことない日常がほのかに光ることばで詠まれている。

そして、あとがきに「料理が好きで海が好きで手紙が好き。」とあるように、手紙の歌がたくさん出てくる。「手紙には愛あふれたりその愛は消印の日のそのときの愛」（「風になる」）、「『元気でね』マクドナルドの片隅に最後の手紙を書きあげており」（「元気でね」）。

たった二首読んだだけで、手紙を書く機会が減っている私たちでも共感できることがわかるのではないだろうか。

一冊読み終えたときには、ずっと前からの友だちだったような「万智ちゃん」が心の中にいるはずだ。

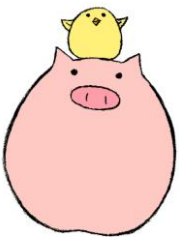
雫井脩介『クローズドノート』



雫井脩介著
『クローズドノート』
KADOKAWA

これは、主人公は文房具店の万年筆売り場でアルバイトし、音楽サークルに精を出す教員志望の女子大生・香恵。満ち足りた日常にどこか物足りなさを感じていた彼女の日常は、引っ越し先のアパートで一冊のノートを見つけたことから少しずつ変わっていく。そのノートは小学校の教員をしていた伊吹先生という女性の日記だった。紙とペンで思いや考えをつづっていく日記というアナログな行為は手紙と少し似ている。そして、ノートの最後に記された3月22日の日記。そのページは主人公の手によってその思い人のもとへと届けられる。書き手である伊吹先生は意図しない形ではあったが、つづられた切なる思いが相手のもとへ伝わったのなら、一種の手紙と言ってもいいのではないだろうか。

読み終えた後に、誰かにやさしくしたくなる、そして万年筆で文字をつづってみたくなる、そんな物語だ。



有川ひろ『レインツリーの国』

「SNSで出会い結婚」なんて最近よく聞く話。でも、この小説が刊行されたのはiPhoneが発売されるよりもちょっと前。きっかけはメールから。「人は見た目が9割」とは（悲しいことに）言い得て妙、だからこそ「文字」から始まった関係は先入観抜きのほんとの相性がわかるのかも知れない。伸とひとみはまさにそんな関係。会う前からの相思相愛っぷりは預手のこちらが恥ずかしくなるほど。しかし、ただの王道の恋愛小説では終わらない。恋人も他人、人にはそれぞれ共有できない心の傷がある。まっすぐで、でも、だからこそ正直になれない。そんなすれ違いと心の機微の描写力は圧巻です。著者の代表作『図書館戦争』シリーズにキーアイテムとして登場する本作品。出自はスピンオフですが、その枠には収まらない迫力があります。もちろん『図書館戦争』シリーズの予備知識は不要です。むしろこれをきっかけに手を伸ばしてみるのもあり。

有川ひろ著
『レインツリーの国』
新潮社

三浦しをん『ののはな通信』

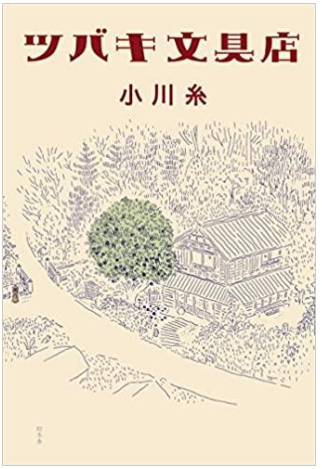
ミッション系のお嬢様学校に通う野々原茜（のの）と牧田はな、ふたりの間を行き来する手紙を通じて物語が進む文通小説である。庶民的な育ちで理性的なのと、外交官の娘であり帰国子女で甘え上手なはなは、対照的だがかけがえのない親友同士だ。しかし、のはそれ以上の感情をはなに抱いており、はなもそれに応える。だが、幸せな時間はそう長く続かず、ある「裏切り」によっていとも簡単に崩れ去ってしまう。けれど、ふたりのあいだのやり取りは終わることがない。大学生になってののが引っ越しても、お互いに恋人ができても、はなが結婚しても、その夫の赴任に従って海外に行っても、ときには連絡が途切れたり、手段が手紙からメールへと変わったりしながら、「ののはな通信」は続いていく。

誰かを愛するとはどういうことなのか。運命の恋が終わった後の人生をどう生きていくのか。手紙形式の文章に引き込まれながら、そんなことに思いをはせたくなる。

第7回河合隼雄物語賞、第25回島清恋愛文学賞受賞作。

三浦しをん著
『ののはな通信』
KADOKAWA

小川糸『ツバキ文具店』



小川糸著
『ツバキ文具店』
幻冬舎

『ツバキ文具店』は「本屋大賞2017」第4位、また同年にはドラマ化もされた作品である。

ポッポちゃんこと雨宮鳩子は鎌倉で小さな文具屋「ツバキ文具店」を営んでおり、また同時に江戸時代から続く代書屋の11代目でもある。代書屋とはただ依頼人の代わりに手紙を代筆するのではなく、文章、字、筆記具や便箋などに工夫を凝らし、依頼人の思いを届けるという仕事だ。ポッポちゃんのもとには離婚報告、天国からの手紙など少し変わった依頼が次々と舞い込んでくる。依頼人の思いに向き合い仕事に励むうちに、ポッポちゃんも仲違いしていた亡き祖母の思いに徐々に気付いていく。

インターネットやSNSの普及により、簡単に情報を受け取り、伝えることができるようになった。便利な世の中になった反面、メールなどによるやりとりは無機質なものになりがちだ。そんな現代だからこそ、直筆の手紙の温かさが染み渡るのではないだろうか。大切な誰かに手紙を書きたくなる。そんな一冊である。

夢野久作・ホノジロトヲジ『瓶詰地獄』

夢野久作著
ホノジロトヲジ絵
『瓶詰地獄』
立東社

この物語は、そのすべてが手紙によって構成されている。最初の一通は、海岸に三つの瓶が漂着したことを知らせる村役場からの手紙。そして残りの三通は、とある兄妹が自らの体験を綴り海に放した、“瓶詰”の手紙だ。

ある時、海で遭難した十一歳と七歳の兄妹は、鮮やかな動植物で満ち溢れた無人島へ流れ着く。しかし幸福な島はやがて、兄妹の心を責め立てる地獄へと変貌する。「この美しい、楽しい島はもうスッカリ地獄です。」こう記された苦しみが、イラストレーター・ホノジロトヲジの繊細な筆致と色使いによって描かれ、手紙の向こう側へと読者を強く引き込む。また、兄妹からの手紙の掲載順は、必ずしも手紙が書かれた順番ではない。これらが書かれた順番を推理することも、この物語の醍醐味である。儚く美しいイラストに導かれ、二人の苦しみと物語の謎に思いを馳せるうち――夢野が創った物語世界に閉じ込められていくようだ。

小川洋子・堀江敏幸『あとは切手を、一枚貼るだけ』

かつて愛し合い、いまは離れてしまった一組の男女。彼らの往復書簡という形をとった合作小説である。静かな言葉で綴られる十四通の手紙は、初めは緩やかな回想をなぞり、そして次第に彼らの関係を変えてしまうに至ったあるできごとを浮かび上がらせていく。小川洋子と堀江敏幸、二人の文章がもつ空気を「似ている」と言い切ってしまうことはあまりにつまらないが、少なくとも、素敵にマッチした一つの作品を創り上げているということはいえるだろう。小説という形をとっていながら、そのイマジネーションの豊かさは詩の に近い印象も覚える。ひとことに多くの色彩が含まれるような、優しく多彩な言葉たちはきっと、くちびるでなぞりたくなるほど快いもの。合作小説がどういう形で展開していくのか、あまり想像できない人も多いかもしれない。けれど、本を読むのが好きな人はもちろんのこと、文章を書く人にも一つの対話としてぜひ読んでほしい一冊。

小川洋子・堀江敏幸著
『あとは切手を、一枚貼るだけ』
中央公論新社

村上春樹『スプートニクの恋人』

「22歳の春にすみれは生まれて初めて恋に落ちた」冒頭の一文で一気に世界観へと引き込まれる。著者村上春樹は、言わずもがな日本を代表する作家であり、早稲田大学OBでもある。彼の作品には私と同年代の学生世代が多く登場するが、そのたびに彼（彼女）らの生活を自分に投影してしまう。これは早大生のみに許された贅沢な楽しみ方であるといつも思う。その中でも私は本作品をおすすめしたい。

突然ローマから送られてくる手紙、そしてミュウからの電話。「スプートニクの恋人」は単なる言葉遊びには留まらない。すみれ、ミュウ、にんじん、ガールフレンド、そして「ぼく」。登場人物は少なく一人称視点で語られる物語は欠落部分が多いが、説明されないことに必然性を感じる。村上文学の描写力と「間」を存分に感じられる本作を是非味わって欲しい。

村上春樹著
『スプートニクの恋人』
講談社

J・ウェブスター『あしながおじさん』

ジュディ・アボットは孤児院で生活を送っている。ある日、ジュディの作文を読んだ資産家の男性が彼女の作家としての才能を見出し、資金援助をしてくれることになり、ジュディは孤児院を出て大学に通えることに。ただし、１つだけ条件があった。それは毎月手紙を書くこと。ジュディはその男性のことを「あしながおじさん」と呼び、約束通り手紙を書き続ける。ジュディの成長と「あしながおじさん」との温かな交流が描かれる心温まる作品となっている。

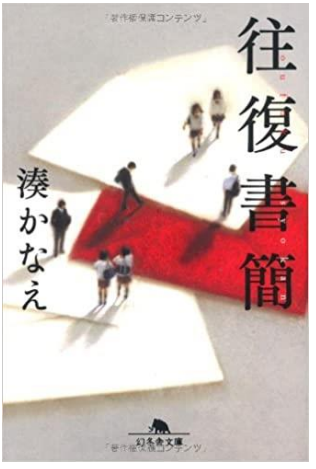
J・ウェブスター著
松本恵子訳
『あしながおじさん』
新潮社

この作品はほとんど全編ジュディからの「あしながおじさん」への手紙で構成されている。ジュディの持ち前のユーモアあふれる文章と所々添えられる挿絵に思わずくすりと笑ってしまう人も多いだろう。『あしながおじさん』という作品名は知っていても、実際読んだことがある人は少ないのではないだろうか。この機会にぜひ手にとって読んでもらいたい。

湊かなえ『往復書簡』

手紙というメディアの特異性は、実際書いたときのことを思えばすぐにわかるだろう。対面の会話よりも、電話よりも、メールよりも、何を相手に伝えて何を伏せようかと慎重に言葉を選んで文字をつづる。

そんな主観的で恣意的な手紙のやり取りだけで構成しながらも、それぞれの人物像を感じさせ、ある事件を描いたあっと驚く推理小説として完成させた著者の技量はさすがのものだ。収録された三篇とも手紙を通して少しずつ秘密が書き明かされていく、その独特の緊張感が新鮮で面白い。イヤミスが多い著作の中ではその要素はやや薄めだ。巧みに話がつながっていき二転三転する展開にぐいぐい引き込まれ、事件の内容は重いものの、明らかになった真相を知って少しすっきりする。読み終えた後、自分が今までもらった手紙や送った手紙を思い返し、久しぶりに誰かに書いてみようなという気分になった。



湊かなえ著
『往復書簡』
幻冬舎

加納朋子『ななつのこ』

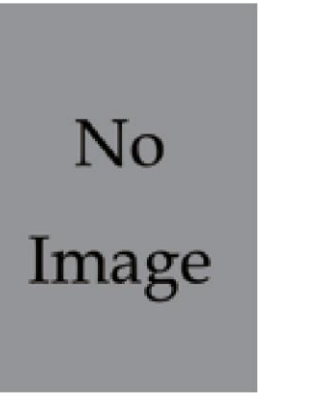
加納朋子著
『ななつのこ』
東京創元社

この物語は、作中作の読者と作者の文通を軸に展開していく、日常系ミステリーである。『ななつのこ』という短編集に惹かれた大学生・入江駒子は、作者・佐伯綾乃に宛てて人生初のファンレターを書こうと決意する。自身が体験した不思議な事件についても書き添え手紙を送ると、届いた返信には事件の謎解きが記されていた――。

「いったい、いつから疑問に思うことをやめてしまったのでしょうか？」「いつだって、どこでだって、謎はすぐ近くにあったのです。」そう記す駒子と綾乃さんとの柔らかなやり取りや人々とのふれあいが、作中作『ななつのこ』と日常の謎とをリンクさせながら軽やかな文体で描かれていく。特に六話目「白いタンポポ」での、少女・真雪と駒子という「おんなじ」な二人が心を通わせていく姿には笑みがこぼれる。

それぞれ独立しているように思われた短編を繋げる見事なラスト、そして物語を締めくくる「追伸」まで、ぜひ見届けていただきたい。

向田邦子『眠る盃』



向田邦子著
『眠る盃』
講談社

『字のない葉書』はあまりに有名な話だろう。私が初めて読んだのは小学生のころ、確か国語の問題文の一つとして読んだように思う。字の書けない妹が〇か×だけ書いて毎日投函するたくさんの葉書。帰る妹を出迎えるべく並べたありったけのかぼちゃ。戦時中の貧しい暮らしの話なのに、妙にわくわくしてしまったのを覚えている。記号だけの葉書に暗号めいたものを感じたのか、赤い大丸を元気よくつけさせた田舎の大ぶりなぼた餅を想像したのか。帰ってきた妹を驚かせたくてせっせとかぼちゃを運ぶ姿も妙に焼き付いて記憶に残っている。

『眠る杯』には『字のない葉書』を含めた全五十九編の短い珠玉のエッセイが詰まっている。描かれる昭和の時代を私は直接は知らない。しかし、すーっと読ませる美しい文章に導かれ、どのエピソードも馴染み深く親しげなものとして懐かしくよみがえる。小説にはない、エッセイの広がりの自由さ、面白さに気づかせてくれる一冊だ。

1

2

本の福袋

どこよりも早い福袋、ご用意しました。福袋といえば、中身が何かわからないのが魅力。

今回は普段は本に添えられているポップが主役。あえてタイトルは書いていません。気になったポップがどんな本かは、ページをめくって確かめてみよう。ジャケ買いならぬ、「ポップ買い」なんてどうだろう。

Next

3

「一日の大半を本や漫画を読んで
過ごしております。こんにちは。」

小説あり、エッセイあり、評伝あり、漫画あり。
筋金入りの読書好き作家による、
情熱的ブックガイド！

口を開けば、本の話と漫画の話。
読書を愛するすべてのひとにおすすめです。

4

ガラスよりも水よりもやさしくおっと、
少し水銀のろにうのにたように、
ちゆちゆと燃えるように。

ことばに温度があるとすれば、この本の言葉はたぶん人肌より少し冷たい。
けれど氷点下ほどではなくて、つめたくてあたたかくて、
そして質感は火のように表皮をするりと撫でていく。

普段なかなか出会えない言葉と、この秋、出会ってみませんか。

6

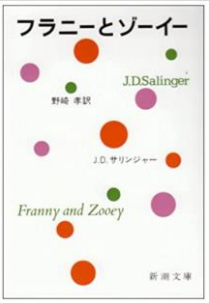
The rain in Spain
stays mainly in
the plain.

モノクロをかみしめる恋愛小説。
９編の名作短編集

5

張り巡らされた伏線

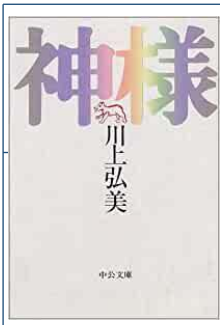
２つの事件が繋がったとき
物語は予想外の展開へ



2. フラニーとゾーイー

J·D·サリンジャー著
野崎孝訳
新潮社

フラニーは周囲のエゴや承認欲求にまみれた言動に耐えきれず、精神的に不安定になっている大学生。作品の前半では、デート中でも自分を抑え切れず感情を爆発させてしまう彼女の姿が描かれ、作品後半では兄ゾーイーがそんな彼女を立ち直らせようと説得を試みる。彼の説得はうまくはない。回りくどく小洒落た言い回しを好む上に、話す内容があちこちに飛んで忙しないし、何が言いたいのか今一つはっきりしない。しかし最後、話が核心に近づくうちに、不思議と一筋の光明が差したような、何か一つの真理を垣間見たような興奮を感じて圧倒される。フラニーのように気取った他者への嫌悪感、また、そんなことを考える自分自身へ嫌悪に悩む人におすすめの一冊。



1. 神様

川上弘美著
中央公論新社

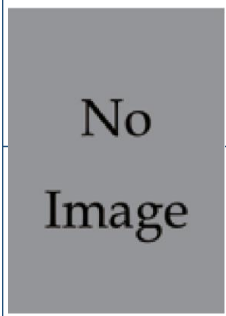
「くまにさそわれて散歩に出る。」――そんなやわらかい書き出しで始まるこの作品は、主人公・「わたし」と不思議な生き物たちとの日常を描く短編集だ。本作は、疲れた心を解きほぐしてくれるような作品が読みたいという人や、日常と地続きの不思議を味わいたいという人におすすめの一冊となっている。頁をめくれば、紳士的なくま、野原に現れる叔父の幽霊、壺をこすると現れる女の人など、不思議な生き物たちのいる日々を過ごすことができる。また、人魚を拾う物語「離さない」では、他の短編とは少し違うぞくりとした感覚も味わえる。

まるで「夢」の中にいるような九つの日常を、ぜひ体験してみてほしい。

4. 新編 銀河鉄道の夜

宮沢賢治著
新潮社

懐かしい風の匂いや、不思議に親しみを感じる街角の風景に、とんと胸を突かれた経験は誰しもが持っているものと思う。どこかしびれるような痛みと心地良さが、その場に杭で止められて柔らかく光り続けるような。そういう灯火を宿すのが宮沢賢治の文章だ。教科書で読んだ人も多いであろう「よだかの星」や表題作「銀河鉄道の夜」のほかにも、優しく美しく、それでいてうら悲しいような不思議な世界が並ぶ。忙しい毎日の中で忘れてしまっている、子どものころに、あるいは子どものころを思い返した日に、心を寄せたあの気持ちを思い出させる短篇集。一篇一篇が短いので、長く難しい文章を読むのが苦手な人にもおすすめの一冊。



3. 本屋さんで待ち合わせ

三浦しをん著
大和書房

一日の大半を本や漫画を読んで過ごしております。こんにちは。」というはじまりからわかるように、作者は大の読書好き。そんな作者の書評や本にまつわるエッセイを集めた一冊である。

批判的にならざるをえないものは取り上げていないと書いてあるため、また、基本的にひとつひとつが短いため、安心してぐいぐい読むことができる。取り上げられた本や漫画に対する愛情を感じながら、読んでみたくなる本もきっと見つかるはず。

「ひとによっていろんな読みかたができるから、本や漫画はおもしろい。」本と読書を愛するすべてのひとにおすすめです。

No Image

6. スペインの雨

佐藤正午著
光文社

「テレクラ」を知っていますか。スマホも携帯もなかった時代に生まれた出会いの場を舞台に、繰り広げられる甘く、苦い恋愛小説短編集。「「The rain in Spain stays mainly in plain」とは、マイフェアレディでイライザの名台詞であり、作中では「スペインの雨はどこに降る？」の合い言葉として用いられている。ユーモアとその行間の空虚さが、恋愛のさびしさと甘さの裏表を鋭く描写する、良作である。

5. もう、聞こえない

誉田哲也著
幻冬社

『ストロベリーナイト』シリーズで知られる誉田哲也のミステリー。身元不明の男性が殺害された。加害者である女性が自ら通報し、自首をしたことで事件解決かと思われたが‥。「声が、聞こえるんです。女の人の声が。」彼女一言で事件が大きく動き出す。そして14年前の未解決事件と繋がるとき、衝撃の真実が明らかになる。

張り巡らされた数多くの伏線と鮮やかな回収、スピーディーな展開。二転三転する物語の展開に引き込まれ、ページをめくる手が止まらなくなること間違いなし。陰惨な事件がテーマだが、会話はテンポがよく、ユーモアが散りばめられていて、ミステリー好きにはもちろんミステリー初心者にもおすすめできる一冊となっている。

Book Portal の紹介

私たちBook Portalは、学生がもっと本に親しみ、読書体験を共有できるようなきっかけ作りをしている、早稲田大学生協の読書企画委員会です。

主な活動内容は

＊生協店舗でのフェア棚設置（POP作成）

＊読書マラソンコメントカード大賞の選考・表彰

＊作家さんによるトークショーの開催

＊出版社見学

＊フリーペーパー発行

＊早稲田祭への出展

など

“文芸”でもなく“”サークル“でもないので、文芸サークルとは似て非なる存在です。

文芸サークルには入りづらい人、文芸サークルと兼サーしたい人など、ちょっとでも本が好きなら歓迎です。入学金とかはないのでいつからでも入れます。学年不問ですので気になった方は是非ご気軽にご連絡ください！

ホームページは以下のQRコードから、またツイッター（@bookportal）もありますので、ぜひチェックしてみてください！

編集後記

2020年は誰にとっても大変な年となりました。Book Portalも例年早稲田祭では教室にて1日限りの本屋さんを出店していましたが、作今のコロナ禍のなか新たな試みとして今回、本冊子を作成しました。活字離れが進んでいる今日ですが、長い自粛期間の中、改めて読書の魅力に気づかれた方も多いのではないでしょうか。皆様の読書生活に少しでもご活用いただけましたら、嬉しいことこの上ありません。

ーEditorsー

長久保永貴　渡邊伶　神田晃寛　清水七海　西川詩織　松井瑛美　時岡冴果　西岡祥

＊本書に掲載している書影はすべて、一定のルールの下、自由利用が認められたものです。

ーContactsー

ご意見・ご感想等は bookportal.per@gmail.com またはBook Portal公式twitterダイレクトメッセージまでお願いいたします。

読ミカケ　Vol.1 2020年　11月　1日発行
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-6-1 (代表)03 (3207)8611
早稲田大学生活協同組合（発行）Book Portal（編集）
無料配布